

代日本小説大系

34

新現

日本近代文學研究會編集

現代日本小說大系

第三十四卷

河出書房版

現代日本小說大系 第三十四卷

昭和二十五年十一月二十五日 初版
昭和二十五年十一月三十日 初版發

現代日本小說大系(重製)

改定 定價 貳百參拾円

地方賣価 貳百四拾円

代著 表著

佐藤 春夫

發行所 東京都千代田區神田小川町三丁目八番地
河出 孝雄

東京都千代田區神田小川町三丁目八番地
日本近代文學研究會

編集者 中村 光夫

印刷者 東京都文京區戸崎町七十一番地
小泉 輝章

發行所

東京都千代田區
神田小川町三ノ八 株式會社

河出 書房

會員番號A一一〇一四番
電話神田(25) 三二七四番

河出書房

目次

佐藤春夫

田園の憂鬱……………四

お絹とその兄弟……………七

美しい町……………九

月かげ……………一三〇

室生犀星

性に目覚める頃……………一三六

美しき氷河……………一四三

童子……………一八一

後の日の童子……………二二四

秋本の母……………三八

瀧井孝作

無限抱擁……………二四

解 說（中村光夫）……………二五

佐
藤
春
夫

田園の憂鬱
お絹とその兄弟
美しい町
月かげ

田園の憂鬱

或は病める薔薇

I dwell alone

In a world of moan,

And my soul wets a stagnant tide

Edgar Allan Poe,

私は、呻吟の世界で

ひとりて住んで居た。

私の靈は澁み腐れた潮であつた。

エドガー アラン ポオ

その家が、今、彼の目の前人現れて來た。

初めのうちは、大變な元氣で砂ぼこりを上げながら、主人の後になり前になりして、飛びまはり纏はりついて居た彼の二足の犬が、やうやう柔順になつて、彼のうしろに、二足並んで、そろそろ隨いて來るやうになつた頃である。高い木立の下を、路がぐつと大きく曲つた時に、

「ああやつと來ましたよ」

と言ひながら、彼等の案内者である緒毛の太つちよの女が、片手で日にやけた額から滴り落ちる汗を、汚れた手拭で

拭ひながら、別の片手では、彼等の行く手の方を指し示した。男のやうに太いその指の尖を傳うて、彼等の踵の落ちたところには、黒つぽい深緑のなかに埋もれて、目眩しいそはそはした夏の朝の光のなかで、鈍色にどつしりと或る落着きをもつて光つて居るささやかな萱葺の屋根があつた。

それが彼のこの家を見た最初の機會であつた。彼と彼の妻とは、その時、各この草屋根の上にさまようて居た彼等の踵を、互に相手のその上に向けて、踵と踵とで會話をした——「いい家のやうな豫覺がある」

「ええ私もさう思ふの」

その草屋根を見つめながら歩いた。この家ならば、何日か遠い以前にでも、夢にであるか、幻にであるか、それとも疾走する汽車の窓からでもあつたか、何かで一度見たことがあるやうにも彼は思つた。その草屋根を焦點としての視野は、實際、何處でも見出されさうな、平凡な田舎の横顔であつた。而も、それが却つて今の彼の心をひきつけた。今の彼の憧れがそんなところにあつたからである。さうして、彼がこの地方を自分の住家に擇んだのも、亦この理由からに外ならなかつた。

廣い武藏野が既にその南端になつて盡きるところ、それが漸くに山國の地勢に入らうとする變化——言はば山國からの微かな餘情を湛へたエピソードであり、やがて大きな野原への波打つプロログでもあるこれ等の小さな丘は、目のとどくかぎり、此處にも起伏して、それが形造るつまらぬ風景

の間を縫うて、一筋の平坦な街道が東から西へ、また別の街道が北から南へ通じて居るあたりに、その道に沿うて一つの草深い農村があり、幾つかの卑下つた草屋根があつた。それはTとYとHとの大きな都市をすぐ六七里の隣にして、譬へば三つの劇しい旋風の境目に出来た真空のやうに、世紀からは置きつ放しにされ、世界からは忘れられ、文明からは押流されて、しょんぼりと置かれて居るのであつた。

一たい、彼が最初にこんな路の上で、限りなく楽しみ、又珍らしく心のくつろいだ自分自身を見出したのは、その同じ年の暮春の或る一日であつた。こんな場所にこれほどの片田舎があることを知つて、彼は先づ驚かされた。しかもその平靜な四邊の風物は彼に珍らしかつた。ずつと南方の或る半島の尖端に生れた彼は、荒い海と嶮しい山とが激しく咬み合つて、その間で人間が微小にしかし賢明に生きて居る一小市街の傍を、大きな急流の川が、その上に筏を長長と浮べさせて押合ひながら荒荒しい海の方へ奔き合つて流れてゆく彼の故郷のクライマックスの多い戯曲的な風景にくらべて、この丘つづき、空と、雑木原と、田と、畑と、雲雀との村は、實に小さな散文詩であつた。前者の自然は彼の峻嚴な父であるとすれば、後者のそれは子に甘い彼の母であつた。「歸れる放蕩息子」に自分自身をたとへた彼は、息苦しい都會の眞中にあつて、柔かに優しいそれ故に平凡な自然のなかへ、溶け込んで了ひたいといふ切願を、可なり久しい以前から持つやうになつて居た。おお！そこにはクラシックのやうな平靜な幸

福と喜びとが、人を待つて居るに違ひない。Vanity of vanity, vanity, all is vanity!「空の空、空の空なる哉都て空なり」或は然うでないにしても……。いや、理窟は何もなかつた。ただ都會のただ中では息が屏つた。人間の重さで壓しつぶされるのを感じた。其處に置かれるには彼はあまりに鋭敏な機械だ、其處が彼をいやが上にも鋭敏にする。そればかりではない、周圍の騒がしい春が彼を一層孤獨にした。「噫、こんな晩には、何處でもいい、しつとりとした草葺の出舎家のなかで、暗い赤いランブの陰で、手も足も思ふ存分に延ばして、前後も忘れる深い眼に陥入つて見たい」といふ心持が、華やかな白熱燈の下を、石燈の路の上を、疲れ切つた流浪人のやうな足どりで歩いて居る彼の心のなかへ、切なく込上げて來ることが、まことに應であつた。

「おお！深い眼、おれはそれを知らなくなつてからも何年になるであらう？ 深い眼！それは言はば宗教的な法悦だ。おれの今最も欲しいのはそれだ。熟睡の法悦だ。即ち肉體がほんたうに生きてゐる人の法悦だ。俺は先づそれを求める。そのある處へ行かう。さあ早く行かう！」彼は自分自身の心のなかでさう呟いた。或は、口に出してさへ呟いた。さうして矢も楯もたまらない、郷愁に似たやうな名づけやうのない心が、その何處とも知れない場所へ、自分自身を連れて行けとせがむのであつた……。 (彼は老人のやうな理智と青年らしい感情と、それに子供ほどの意志とをもつた青年であつた。)

その家が、今、彼の目の前に現れて來たのである。

道の右手には、道に沿うて一條の小渠があつた。道が大きく曲れば、渠もそれについて大きく曲つた。そのなかを水は流れて行き流れて來るのであつた。雑木山の裾や、柿の樹の傍や厩の横手や、藁の下や、桐畑や片隅にぼつかり大きな百合や葵を咲かせた農家の庭の前などを通つて。幅六尺ほどのこの渠は、事實は田へ水を引くための灌漑であつたけれども、遠い山間から來た川上の水を眞直ぐに引いたものだけに、その美しさは、溪と言ひ度いやうな氣がする。青葉を透して降りそそぐ日の光が、それを一層にさう思はせた。へどろの緒土を洒して、洒し盡して何の濁りも立てずに、淺く走つて行く水は、時時ものに堰かれて、ぎらりぎらりと柄になく閃いたり、さうかと思ふと縮緬の皺のやうに繊細に、或は或る小さなびくびくする痙攣の發作のやうに光つたりするのであつた。或は、その小さな輝きが魚の鱗のやうに重り合つて居るところもあつた。涼しい風が低く吹いて水の面を滑る時には、其處は細長い瞬間的な銀箔であつた。薄だの、もう夙くにあの情人にものを訴へるやうなセンチメンタルな白い小さい花を失つた野茨の一かたまりの藪だの、その外、名もない併しそれぞれの花や實を持つ草や灌木が、渠の兩側から茂り合ひかぶさるかかると、水はそれらの草のトンネルをくぐつた。さうしてその影を黒く涼しく浮べては、ゆらゆらと流れ去つた。或る時には、水はゆつたりと流れ淀んだ。それは旅人が自分の來た方をふりかへつて佇むのに似て居た。

そんな時には土耳古玉のやうな夏の午前の空を、土耳古玉色に——或は側面から透して見た玻璃板の色に、映して居るのであつた。快活な蜻蛉は流れと微風とに逆行して、水の面とすれすれに身軽く滑走し、時時その尾を水にひたして卵を其處に産みつけて居た。その蜻蛉は微風に乘つて、しばらくの間は彼等と同じ方向へ彼等と同じほどの速さで、一行を追ふやうに従うて居たが、何かの拍子についと空さまに高く舞ひ上つた。彼は水を見、また空を見た。その蜻蛉を呼びかけて祝福したいやうな子供らしい氣輕さが、自分の心に湧き出るのを彼は知つた。さうしてこの楽しい流れが、あの家の前を流れて居るであらうことを——想ふのが、彼にはうれしかつた。

劇しい暑さは苦しい、楽しい、と表現しようとして木の葉の一枚一枚が寶玉の一斷面のやうに輝くと、それらの下から蟬は焼かれて居るやうに呻いた。灼けた太陽は、空の眞中近く昇つて來て居た。併し、彼の妻は、暑さをさほどには感じなかつた。併し、彼の妻から暑さを防いだものは、その頭の上の紫陽花色に紫陽花の刺繡のあるパラソル——貧しい嫌な天蓋——ではなかつた。それは彼の女の物思ひであつた。彼の女は今歩きながら考へ耽つて居る、暑さを身を感じる閑もないほど。彼の女は考へた——さうすれば今間借りをして居る寺のあの西日のくわつと射し込む一室から涼しいところへ脱れられる。それよりもあの下卑た俗惡な慾張りの口うるさい梵妻の近くから脱れられる。さうして、靜に、涼しく、二人は二人して、言ひたい事だけは言ひ、言ひたくない事は一

切言はずに暮したい住みたい。さうすれば、風のやうに捕捉し難い海のやうに敏感すぎるこの人の心持も氣分も少しは落着くことであらう。あれほどの意氣込みで田舎を憶れて來ながら、儼ながらもわざわざ買つて貰つた自分の畑の地面をどう利用しようなどと考へて居るでも無く（それはもとよりさうであらうとは思つたけれども）それよりも本一行見るではなく字一字書かうとするでもなく、何一つ手にはつかぬらしい。さうして若しそんな事でも言ひ出せばきつと吐鳴りつけるにきまつて居る、それでなくてさへも、もう全然駄目なものと見放されて居る——わけて自分との早婚すぎる無理な結婚の以後は、殊にさう思はれて居るらしい父母への心づかひもなく、ただうかりかと——ではないとあの人自身では言つても、とにかくうかりかと、その日その日の夢を見て暮して居るのである。何時、建てるものとのない家の圖面の、而も實用的といふやうな分子などは一つも無いものを何枚も何十枚も、それは細かく細かく描いて居るかと思ふと、不意に庭へ飛び出して、犬の眞似をして犬と一緒になつて、燃えて居る草いきれの草原を這つたり轉げまはつたり、さうかと思ふと突然破れるやうな大聲で笑ひ出したり叫び出したりするこの人は、ほんたうに何か非常に寂しいのであらう。何事も自分には話してくれはしないから解る筈もない。何か自分には隠して居るのではなからうか……。彼の女は、五六日前に讀み了つた藤村の「春」を思ひ出した。單純な彼の女の頭には、自分の夫の天分を疑うて見るなどとは知らずに、自分

の夫のことをその小説のなかの一人が、自分の目の前へ——生活の隣りへ、その本のなから抜け出して來たかのやうにも思つて見た……。あれほど深い自信のあるらしい藝術上の仕事などは忘れて、放擲して、ほんたうにこの田舎で一生を朽ちさせるつもりであらうか。この人は、まあ何といふ不思議な夢を見たがるのであらう……。それにしても、この人は、他人に對しては、それは親切に、優しく調子よくしながら、何故かうまで私には氣難かしいのであらう。若しや、あの人のある女に對する前の戀がまだ褪せきらない間に、私はあの人の胸のなかへ這入つて行つて、そのためにあの人はしばらくはあの女を忘れては居たけれども、根強く残つて居たあの戀が何時の間にか再び自分をのけものにしてまた芽を出したのではなからうか。さうして私には辛くあたる……。今のままでは、さぞかし當人も苦しいであらうが、第一そばに居るものがたまらない。返事が氣に入らないといつては轉ぶほど突きとばされたり、打たれたり、何が氣に入らないのか二日も三日も一言も口を利かうとはしなかつたり……。あの人はきつと自分との結婚を悔いて居るのだ。少くとも若し自分ではなく、あの女と一緒に住んで居たならばどんなに幸福だつたらうかと、時々、考へるに違ひない。考へるばかりではない、現に、自分にむかつてさう言つたことさへある——「あの時、おれがあんな女、あの純潔な素直な娘と一緒になれさへしたならば、あの人が私をよく統一して、おれは今ごろ、いろいろな意味でもつと美しいもつと善い生活が出來て居た

だらうに」と……。實際あの女は、自分も知つて居るけれども、自分などよりはもつと美しく、もつと優しい。私はあの人があの女をどんなに深く思つて居るかはよく知つて居る……いや、いや、さうではない。あの人はやつぱりあの人身で何か別のことを考へ込んで居るのである……さうだ、夫は、「ただ、私をそつとして置いてくれ」と言つた……ふと、

「俺には優しい感情がないのではない。俺は唯それを言ひ現すのが恥しいのだ。俺はさういふ性分に生れつゝいたのだ」

彼の女は、昨夜、いつになく打解けて彼が語つた時、彼の女にむかつて言つた彼の女の夫の言葉を思ひ出すと、その言葉を反芻しながら歩いた。さうして未だ見たことのない家の間どりなどを考へた。たとひ新婚の夢からはとづくに覺めたころであつても、こんな暑さの下でも、ただ單に轉居するといふだけの動機で心持がふだんよりもずつと活き活きとして來て、こんなことを考へて悲しんだり、喜んだり、慰んだりすることの出来るのは、まだ世の中を少しも知らない幼妻の特權であつたからだ。さうしてそれがまた、あの案内の女が、喋りつづけに喋つて居るその家の由來に就て、何の興味も持たぬらしく、ただ無愛想に空返事を與へて居るに過ぎなかつた所以ででもある。——この案内の女は、その長い暑苦しい道の始終を、ながながと喋りつづけて休まなかつた。この女は自分の興味をもつて居るほどの事なら、他の何人にとつても、非常に面白いのが當然だと信じて居る單純な人人の

一人であつたから。

こんな道を、彼等は一里近くも歩いた。

さうしてその家は、もう、彼等一同の目の前に來てゐた。

家の前には、果して渠が流れて居た。一つの小さな土橋が、茂るがままの雜草のなかに一筋細く人の歩んだあとを残して、その上を歩く人人に、あの幅一間あまりの渠を越させて、人人をその家の入口へ導く。

入口の左手には大きな柿の樹があつた。さうして奥の方にもあつた。それらの樹の自由自在にうねり曲つた太い枝は、見上げた者の目に、「私は永い間ここに立つて居る。もう實を結ぶことも少くなつた」とその身の上を告げて居るのであつた。その老いた幹には、大きな枝の脇の下に寄生木が生えて居た。その樹に對して右手には、その屋敷とそれの地つづきである桐畑とを區限つて細い溝があつた。何の水であらう、水が涸れて細く——その細い溝の一部分を尙細く流れて男帯よりももつと細く、水はちよろちよろ喘ぎ喘ぎ通うてゐた。じめじめとした場所を、一面に空色の花の月草が生え茂つて居た。また子供たちが「こんぺたう」と呼んで居るその菓子形の形をした灰赤く白い小さな花や、又「赤まんま」と子供たちに呼ばれて居る野花なども、その月草に雜つて一帯に蔓延つて居た。それはなつかしい幼な心をよびさます叢であつた。晝間は螢の宿であらう小草のなから、葉には白い堅の縞が鮮に染め出された蘆が、すらりと、十五六本もひとところに集つて、爽やかな長いそのうへ幅廣な葉を風にそよがせ

て、ざわざわと音をたてて居るのであつた。屋敷の奥の方から流れ出て来た水は、それらの小草の、莖をくぐつてそれらの蘆の短い節節を洗ひきよめながら、うねりうねつて、解きほぐした絹糸の束のやうにつやつやしく、なよやかに揺れながら流れた。さうして、か細く長長しい或る草の葉を、生えたままで流し倒して、その草のために一時動流することをさへぎられたそれらのささやかな水は、その草の葉を傳うて、より大きな道ばたの渠のなかへ、水時計の水のやうにぼたりぼたりと落ち濺いで居た。彼にはこの家の屋後に、湧き立つ小さな清新な泉がありさうにも感ぜられた——さういふ地勢でもあつたから。

家の背後は山つづきで竹藪になつて居た。竹のなかには素晴しく大きな丈の高い椿が、この清楚な竹藪のなかの異端者のやうに、重苦しく立つて居た。屋敷の庭は丈の高い——人間の背丈よりも高くなつた神の生垣で取り圍まれてあつた。家全體は、指顧の遠さで見た時にさうであつた如く、目の前に置かれて見ても、茂るにまかせた樹木の枝のなかに埋められて、茂るにまかせた草の上に置かれてあつた。

犬は一足づつ土橋の側から下りて行つて、灌水の水を交交に味うた。

彼はその土橋を渡らうともせず、^{けいゐれとつて}「三徑就荒」と口吟みたいこの家を、思ひやり深さうにしばらく眺めた。

「ねえ、いいぢやないか、入口の氣持が」

彼はこの家の周圍から閑居とか隱棲とかいふ心持に相應し

た或る情趣を、幾つか拾ひ出し得てから、妻にむかつてかう言つた。

「然うね。でも随分荒れて居ること。家のなかへ這入つて見なければ……」

彼の妻は少々不安さうに、又さかしげに、氣まぐれな夫をたしなめる時にすべての妻がする口調をもつてさう答へた。併し、すぐ思ひかへして、

「でも、今のお寺に居ることを思へば、何處だつていいわ」
今飲んだ水から急に元氣を得た二疋の犬は、主人達よりも一足さきに庭のなかへ跳り込んだ。松の樹の根元の濃い樹かげを擇んだ二疋の犬どもは、わがもの顔に土の上へ長長と身を横へた。彼等は顔を突き出して、下顎から喉首のところを地面にべつたりと押しつけ、兩方から同じ形に顔を並べ合つた。さうして全く同じやうな様子に體を曲げて、後脚を投げ出した様子は、まことに愛らしいシンメトリーであつた。赤い舌を垂れて、苦しげな息を吐き出し乍ら、庭に這入つて来た彼等の主人達の顔を見無邪氣な上眼で眺めて、靜かに楽しさうに尾を動かして見せた。いかにも落着いたらしいその姿は、此處はもう自分たちの家だといふ事を、彼等の主人たちよりさきに十分に豫覺して居らしいやうにも、彼には見られるのであつた。若しこの時、妻が彼のそばに居たならば彼は妻にかう言つたらう——

「ね、フラテもレオ（二つとも犬の名）も賛成してゐるよ」

けれども彼の妻は、案内の女と一緒にその縁側の永い間閑

されて居た戸を開けようとして、鍵で鍵穴をがたがた言はせて居る。

樹といふ樹は茂りに茂つて、緑は幾重にも積み重つた。錯雑した枝と枝とは網の目になり壁になり軒になつて、庭はほとんど日かげもさし込まなかつた。土の匂は黒い地面から、冷冷と湧いて來た。彼は足もとから立ちのぼるその土の匂を、香を匂ふ人のやうに官能を尖らせて沁み沁みと味うて見た——ぢやらぢやらと涼しく音を立てて居た鍵束の音がやまつて、縁側の戸が開けられるまで。

× × ×

「やつと、家らしくなつた」

昨日、門前で洗ひ淨めた障子を、彼の妻は不慣れな手つきで張つたのである。最後の一枚を張り了つた時、それを茶の間と中の間のあひだの敷居へ納めようとして立つて居る夫の後姿を見やりながら、妻は満足に輝いてさう言つた。

「やつと家らしくなつた」彼の女は同じ事を重ねて言つた。

「疊は直ぐかへに來るといふし……。でも、私はほんたうに厭だつたわ、をとつひ初めてこの家を見た時にはねえ。こんな家に人間が住めるかと思つて」

「でも、まさか狐狸の住家ではあるまい」

「でもまるで浅茅が宿よ。でなげや、こほろぎの家よ。あの時、疊の上一面にびよんびよん逃げまはつたこほろぎはまあどうでせう。恐しいほどでしたわ」

「浅茅が宿か、浅茅が宿はよかつたね。……おい、以後この家を雨月草舎と呼ぼうぢやないか」

(彼等二人は——妻は夫の感化を受けて、上田秋成を讚美して居た。)

夫の愉快げな笑ひ顔を、久しぶりに見た妻はうれしかつた。「そこで、今度は井戸換へですよ、これが大變ね。一年もまるで汲まないといふのですもの、水だつて大がい腐りますわねえ」

「腐るとも、毎日汲み上げて居なければ、俺の頭のやうに腐る」

この言葉に、「又か」と思つた妻は、今までのしやいだ調子を忘れておづおづと夫の顔を見上げた。しかし夫の今日の言葉はただ口のさきだけであつたと見えて、その骨ばつた顔にはもとのままの笑があつた。それほど彼は機嫌がよかつたのである、それを見て安心した妻は甘えるやうに言ひ足した。

「それに、庭を何とかして下さらなげやあ。こんな陰氣なのはいや！」

疲れて壁にもたれかかつた妻の膝には、彼と彼の女との愛猫が、しなやかにしのび寄つてのつそりと上つて居るところであつた。

「青(猫の名)や。お前は暑苦しいねえ」

と言ひながらも、妻はその猫を抱き上げて居るのである。彼の家庭には犬が居る。猫が居る。一たん愛するとなると、

程度を忘れて溺愛せずには居られない彼の性質が、やがて彼等の家庭の習慣になつて、彼も彼の妻も人に物言ふやうに、犬と猫とに言ひかけるのが常であつた……。

× × ×

彼等夫婦がこの家に住むやうになつた日から、遡つて數年の前である——

この村で一番と言はれて居る豪家N家の老主人は、年をとつて、ひどく人生の寂寞を感じ出した。普通人にとつてかといふ時に最も必要なものは、老いと若きとを問はず異性であつた。さうして、この老人は、都會から一人の若い女を連れて來た。この豪家は、この風流人の代にその田の半分を無くしたのだけれども、流石に老人の考へは金持らしいものであつた——ただ美しいだけで、何の能もないやうな女はつれて來なかつた。少し位は醜くとも、年さへ若ければ我慢するとして、村の爲めにもなり、それよりも自分の經濟の爲めにもなるやうな女を擇んだのであつた。一口に言へば、彼は、今までは村に無くて不自由をして居た産婆を副業にする妾を蓄へたのだ。それから自分の家の離れ座敷をとり外して、彼の屋敷からはすぐ下に當るところへ、それを建て直した。冬には朝から夕方まで日が當るやうな方角を考へて、四間の長さをつづく縁があつた。玄關の三疊を抜けて、六疊の茶の間に爐を切らせた。黒柿の床柱と、座敷の欄間に嵌込んだ麻の葉つなぎの棧のある障子の細工の細かさは、村人の目をそば

立たせた。さすがは、うちの山から一本擇りに擇つて伐り出した柱だ、目ざはりな節一つない、と大工はその中古の柱を愛撫しながら自分のもののやうに愛めた。さうして農家の神神しいほど廣い土間のある、太い棟や梁の眞黒く煤けた臺所とは變つて、その家には、板をしきつめた臺所に、白足袋を穿いて、そろそろ衣服の裾を引摺つた女が、そこで立働くやうになつた。老人は、その家督を四十幾つかになつた自分の長男に譲つた。さてこの老人は幸福であつた。村の人人は、自分の年の半分にも足らぬ若さの茶吞友達を得た隠居に就てかげ口を利いた。併し、そんな事は隠居の幸福を傷けはしなかつた。

けれども、併しすべての平和と幸福とは、短い人生の中にあつて最も短い。それはちやうど、秋の日の障子の日向の上にふと影を落す鳥かげのやうである。つと來てはつと消え去る。さうして鳥かげを見た刹那に不思議なさびしさが湧く。老人のこれ等の平和の日も東の間であつた。

若い妾は、程なく、都會から一人の若い男を誘つて來た。

村の人人は、この若い男を「番頭さん」「お産婆の番頭さん」と呼んだ。村の人人は産婆には、果して「番頭さん」が入用なものかどうかを知らなかつた。さうしてこの隠居は、自分の若い妾が、自分には無斷で、若い「番頭さん」を雇入れた事に就て不満であつた。非常に不満であつた。第一にこの若い男女の生活は田舎の人人の目には贅澤すぎた。隠居の豫算と少し違ひすぎた。隠居は彼等がもつとつつましやかであり

得る筈だと考へ初めた。その事を彼の妾に度度言ひつけた。初めは遠まはしに遠慮勝ちに、併しだんだん思ひ切つて言ふやうになつた。或る夜には夜中言ひ募ることがあつた。「番頭さん」は多分これ等の對話を壁一重に聞いただらう。或るそんな夜の後の日に——彼の女が初めて村へ來てから一年ばかりの後、若い「番頭さん」を若い妾が「雇入れ」てから半年ほどの後、或る夕方、彼等二人の男女の姿は、突然この村から消えた。夕方に村の方から歸つて來た馬方は、山路の夕闇のなかで、くつきりと浮上つて白い丸い頬が目についたので、よく見ると「Nさんのお産婆」だつた、とその次の朝村の人人に告げた。併し、これは多分、この男が實際にこれを見たわけではなく、彼等が居なくなつたと聞いた時に、思ひついた嘘であつたかも知れない。でなければ彼は歸つて來ると直ぐその事を、珍らしげに、手柄顔に言ふべき筈だからである。人はこんな時に、ちよつとこんな事を言つて見たいやうな一種の藝術的本能を、誰しも多少持つて居るものである。——それはどうでもいいとして、この話は、話題に饑えて居る田舎の人人を喜ばせた、當分の間。さうして二十八の女には、七十に近いあの隠居よりは、二十四五の若者の方が、よく釣合ふべき筈だつたといふのが、村の輿論であつた。

痛ましいのは、若い妾に逃げられたこの隠居が、その後、植木の道樂に没頭し出した事である。

彼は花の咲く木を庭へ集め出した。今日はあの木をこちらに植ゑ變へ、昨日は別の庭からこの木を自分の庭にうつし

た。さうして明日は何かよい木を捜し出さねばと、毎日毎日、土いぢりに寧日がなかつた。春には牡丹があつた。夏には朝顔があつた。秋には菊があつた。冬には水仙があつた。さうして、彼の逃げて仕舞つた妻の代りに、二人の十と七つとの孫娘を、自分の左右に眠らせた牀のなかで、この花つくりの翁は眠り難かつた。彼は月並の俳諧に耽り出した。

隠居は死んだ、それから丁度一年経つた後に。彼は、かうして集めた花の木のそれぞれの花を僅かばかり楽しんだばかりであつた。さうしてその家は、彼の末の娘と共に村の小學校長のものになつた。村の校長はこの隠居の養子だつたからである。すると拔目のない植木屋があつて、算術の四則には長けて居り、それを實の算盤に應用することにも巧ではあつたけれども、美に就ては如何なる種類のそれにも一向無頓着な、當主の小學校長をたぶらかして、目ぼしい庭の飾りは皆引抜いて行つた。大木の白木蓮、玉椿、槇、海棠、黒竹、枝垂れ櫻、大きな花栢榴、梅、夾竹桃、いろいろな種類の蘭の鉢。さうしてそれ等の不幸な木はかくも忙しくその居所を變へなければならなかつた。土に慣れ親しむ暇もなかつた。かうしてそれ等のうちの或るものは、爲めに枯れたかも知れない。

小學校長は、ちやうど新築の出來上つた校舎の一部へ住んだ。自分の貰つたこの家は空家にして置いた。さうして居るうちにこの家を借り手があれば貸したいと考へ出した。住む人が無ければ、家は荒廢するばかりである。たとひ二圓でも

一圓五十錢でも、家賃をとつて損になることはない、と校長先生の考は極く明瞭である。ところが、田舎では大抵の人は自分自身の家を持つて居る。たとひ軒端がくづれて、朽ち腐つた薬屋根にむつくりと青苔が生えて居るやうな破家なりとも、親から子に傳へ子から孫に傳へる自分の家を持つて居た。どんな立派な家にしろ、借家をして住まねばならないやうな百姓は、最後の最後に自分の屋敷を抵當流れにしてしまつた最も貧しい人人に決つて居た。かくて、あの隠居が愛する女のために、又自分の老後の楽しみにと建てたこの家は實に貧しい貧しい百姓の家に化してしまつたのである。隠居が茶の間の茶釜をかけた爐には、大きないぶり勝ちな松薪が、めちやめちやに投込まれて、その煙は田舎家には無駄な天井に邪魔されて、家から外へ抜けて行く路もなかつた。さうして部屋を形造つた壁、障子、天井、疊は直ぐに煤びて來た。氣の毒な百姓の一家は立籠つた煙などを苦にしては居られない。反つてそれから来る溫さに感謝して、秋の、冬の長い夜な夜なを、繩を綱りたり、草鞋を編んだりして、夜を更かさねばならなかつた。家賃は四月目五月目位から滞り出した。疊はすり切れた。柱へはいろいろな場合のいろいろな痕跡がいろいろの形に刻みつけられた。「せめては下肥位はたまるだらう」と校長先生が考へたにも拘はらず、校長先生の作男が下肥を汲みに行く朝は、其處は何時もからつぽだつた。何となれば家の借り手の貧しい百姓が、自分の借りて居る畑へそれを運んでしまつた後であつたから。校長先生はひどくこ

の借家人を悪く思ひ初めた。會ふほどの人には誰彼となく、貧乏な百姓の狡猾を罵り、訴へた。さうして「どうせ貧乏する位の奴は、義理も何も心得ぬ狡猾漢だ」といふ結論を與へ去つた。外の村人は、直ぐ校長先生の意見に賛同の意を示した。そこで校長先生は自分の論理が眞理として確立されたのを感じ出した。次には、こんな男に家を貸して置くよりも、寧ろ荒れるにまかせて置いた方がどれほどよいか解らないと思ひ出した。何故かといふに、この男に家を貸すことは、積極的に荒廢させることである。反つて、空家として打捨てて置くことはその消極的な方法である。さうしてこの借家人は逐ひ立てられた。村の人人は校長先生の態度は合理的だと考へた。

これらの間——あの隠居が亡くなつてから後は、その庭の草や木のことを考へるやうな人は、ひとりもなかつた。家と庭とは荒れに荒れた。ただ一人、あの貧乏な百姓の小娘が、隠居が在世の折に植ゑられたままで、今は草の間に野生のやうになつて、年年に葉が衰へになり、莖がくねつて行く菊畑の黄菊白菊の小さな花を、秋の朝毎に見出しては、ちぢくれた髪のかんざしにと折りとつた……

……彼は縁側に立つて、庭をながめながら、あの案内者であつた太つちよの女が、道道語りつづけた話のうちに、彼一流の空想を難へて、ぼんやり考へるともなく考へ、思ふともなくそんなことを思ひて居た。

「フラテ、フラテ」裏の縁側の方では、彼の妻の聲がして、

犬を呼んで居る。「おおよしよし、レオも来たのかい。おお可愛いね。何も上げるのぢやなかつたのだよ。フラテや、お前はね、今のやうにあんな草ばかりのところで遊ぶのぢやありませんよ。蜷が居ますよ。そらこの間のやうに、鼻の頭を咬まれて、喉が腫れ上つてお寺の和尚さんのやうにこんな大きな顔になつて来ると、ほんたうに心配ぢやないか。いいかい。フラテはもうこの間で懲りたから解つたわね。レオや、お前は氣をおつけよ。お前の方はおとなしいから大丈夫だね……」彼の妻は牧歌を歌ふ娘のやうな聲と心持とで、自分の養子である二足の犬に物云うて居る。さうして涼しい竹藪の風は、そこから彼の立つて居る方へ抜けて通りすぎた。

× × ×

眞夏の庭園は茂るがままであつた。

すべての樹は、土の中ふかく出来るだけ根を張つて、そこから土の力を汲み上げ、葉を彼等の體中一面に着けて、太陽の光を思ふ存分に吸ひ込んで居るのであつた——松は松として生き、櫻は櫻として、槇は槇として生きた。出来るだけ多く太陽の光を浴びて、己を大きくするために、彼等は枝を突き延した。互に各の意志を遂げて居る間に、各の枝は重り合ひ、ぶつつかり合ひ、絡み合ひ、犇き合つた。自分達ばかりが、太陽の寵遇を得るためには、他の何物をも顧慮しては居られなかつた。さうして、日光を享けることの出来なくなつた枝は日に日に細つて行つた。一本の小さな松は、杉の下で

赤く枯れて居た。櫛の生垣は背丈が不揃ひになつて、その一列になつた頭の線が不恰好にうねつて居る。それは日のあたるところだけが生ひ茂り丈が延びて、諸の大きな樹の下に覆はれて日蔭になつた部分は、落凹んで了つたからであつた。又、その或る部分は葉を生かすことが出来なくなつて、恰も城壁の覗き窓ほどの穴が、ぽつかりとあいて居るところもあつた。或る部分は分厚に葉が重り合つてまゝ團つて繁つて居るところもあつた。或る箇所は全く中断されて居るのである。といふのは、丁度その生垣に沿うて植ゑられた大樹の松に覆ひ隠されて、そればかりか、垣根の眞中から不意に生ひ出して來た野生の藤蔓が人間の拇指よりもつと太い蔓になつて、生垣を突分け、その大樹の松の幹を、恰も鷹を捕へた綱のやうに、ぐるぐる巻きに巻きながら攀ぢ登つてその見上げるばかりの梢の梢まで登り盡して、それでまだ満足出来ないと思える——その卷蔓は、空の方へ、身を悶えながらもの狂しい指のやうに、何も無いものを捉へようとしてあせり立つて居るのであつた。その卷蔓のうちの一つは松の隣りのその松より一際高い櫻の木へ這ひ渡つて、仲間のどれよりも適に高く、空に向つて延びて居た。又、庭の別の一隅では、梅の新しい枝が直立して長く高く、譬へば天を刺貫かるとする槍のやうに突立つて居るのであつた。曾ては菊畑であつた軟かい土には、根強く蔓つた雑草があつた。それは何處か竹に似た形と性質とを持つた強さうな草であつた。その硬い莖と葉とは土の表面を網目に編みながら這うて、